

まごころだより

2017年10月号



5人に1人が65歳以上という高齢社会になり、最期の時期をどこで、誰と、どのように過ごすかというのが課題になっています。ある調査では、余命宣告を受けた時、最期の時期を自宅で迎えたいと希望する人は60%、その中で最期の時を自宅で過ごせると考えている人は18パーセント、最期を実際自宅で迎えた人は12.6%(2010年統計)とありました。つまり、自宅で家族と最期まで暮らしたいと思っても、よっぽどでないかぎりかなえられないというのが今の現実です。一方67年前の1950年では自宅で最期を迎えた人は80%とほとんどの人が自宅で最期を迎えていました。時代

は大きく変わりました。まず家族のありかたが変わりました。核家族化し独居の高齢者や高齢者だけの世帯が多くなりました。国は医療費削減のために病院から在宅へと転換を求め、在宅の良さをアピールするのですが、自宅で最期を迎えるには医療・介護ともに制度も体制も追いついていません。

では在宅が進まないのは制度や体制が整わないからだけなのかと言うと、私はそうではないと思っています。そこには心の問題があると思っています。こんな統計があります。在宅生活を困難にしている理由は何かという問いに対して一番多い答えは「家族に迷惑をかけたくないから」(72%)です。その他には本人と家族または家族間の意見の不一致。本人の意思が伝わらない。本人や家族が死を受け入れられず病院を希望するなどが続いています。ここから見えてくるのは「本当は家に居たい、家族と共に生活したい」とは思うけれど「家族に迷惑はかけられない、苦労させたくない」という思いです。その思いが在宅を困難にしている一因だと思うのです。



私は10年近く(今も)毎月2回程度大阪にある実家の親の介護に通っています。義父母の最期の時期も見てきました。周囲の人は「大変ね」とねぎらってくれますが、私自身はそれほど大変だとは思っていません。もちろん、不満や愚痴を口にすることはありますが、その原因は年老いた両親にあるのではなく、他の家族・兄弟や親せきの人たちとの人間関係や無理解によるものがほとんどです。認知であれ片麻痺であれ、それは仕方のないことで、年老いた両親は悪くはないのです。そして終わってみれば、大変という思いよりも多くのことを教えてもらったという思いの方が強くあります。在宅介護を貫いたからから思い残すことなく、親の死をもすんなり受け入れることが出来たのだと思います。これは私だけの思いではなく、一緒に祖母を看取った娘も「週末ごとに帰省するのは大変だったけれど、いろんなことを考え、いい経験をした」と言います。



そんな経験をした私ですが、自分たちの老後に関しては「お父さんやお母さんのことは心配しなくていい。自分たちでなんとかするから」と言ってきました。しかし、体調を崩し入院治療を受け、今後のことを考えるうちに「本当に心配かけずにやっていけるのか」「本当に自分たちだけでなんとかやっていけるのか」と思うようになりました。もちろん私にも老いゆく姿を見せたくないという思いはあります。でもそれを見せることも大事なことなのかもしれないと思うようになりました。また子供に苦勞させたくないという親心もあります。でもその一方で、ぬくぬくと育ち苦勞を知らない子供への不満や不安があるのも確かです。苦勞して人間は成長していくものだとしたら、ものわがりのいい親を演じることは子供の成長にとってかえってよくないことではないかと思うようになったのです。

娘は現在 8 か月の子供を抱えて子育て中ですが、子育ては動物でもします。娘だけが特に偉いわけでも大変なわけでもありません。動物と同じレベルです。しかし動物は介護をしません。介護をするのは人間だけです。介護が人間であることの証であるのなら「心配しなくてもいい」とか「あなたに苦勞はかけたくない」というのは間違っているのではないかと考えるようになりました。そして介護の場を提供することも大事なことではないかと思うようになったのです。

どんなふうに面倒をみてるのかそれは分かりません。人それぞれ条件が違いそれぞれの人に合った介護の形があると思っています。同居していても一緒に時を過ごそうという気持ちのないところに介護は成り立ちません。遠く離れていても親を思い介護しようとしている人を何人も知っています。施設に入所せざる得なくなっても毎日親のもとに通い施設任せにせず、かかわりを持ち介護している人もいます。一緒に住んでいても遠く離れていても「介護したい」「介護しよう」という気持ちのあるところに介護は成り立つものだと思います。

親は長男だけのものでも、同居している家族だけのものでも、いわんや長男の妻のものでもありません。次男にとっても結婚し名字が変わってしまった娘にとっても親は親です。親は実であれ義理であれすべての子供のものであり、すべての子供に介護する権利と義務と責任があると思います。

私は「心配しなくていいからね。自分たちでなんとかするから」という前言を撤回し「ありがとう苦勞かけるけど、面倒みてね。頼むね。」と言うことにしました。苦勞知らずで、ぬくぬくと育った娘は、最後にはお手上げになって「ごめん、面倒みきれなくなった」と言うかもしれません。遠距離介護でお互いにストレスをため、苦しむことになるかもしれません。一緒に住んで愚痴ばかり言っているかもしれません。それでもいいと思っています。悩んで苦勞して子供はいろんなことを学び成長していくのだと思います。年老いて、死んでいく往く姿を見せる、それは親の最後の務めだと今は思っています。



10月の行事予定	
4日(水)	小物づくり
7日(土)	ハーモニカ演奏
12日(木)	ピアノ演奏
13日(金)	惣菜またはお菓子づくり
16日(月)	歌謡ショー
26日(木)	食事会